「アブラハムとアビメレク」（創世記二一章二二～三四節）

1　再びアビメレク

アビメレクという人物がまた出てきます。ゲラルの王です。二〇章の後半に出ていました。今日の箇所は、その続きです。前のところを少し思い出しながら、今日の箇所に入りたいと思います。

ソドムの滅亡を目の当たりにしたアブラハム、彼はそれまで住んでいたカナンの高地を離れ、南に移動します。新たに住みはじめたのはカナンの南、ネゲブ地方のゲラルというところでした。ペリシテの国（二一・三四）で、アビメレクも、ペリシテ人の王と呼ばれています（二六・一）。

そのゲラルで、アビメレク王が、アブラハムの妻サラを後宮に迎え入れるということがあった。覚えておられるでしょうか。

アビメレクは夢の中に現れた神にサラはアブラハムの妻だと知らされ、とがめられます。しかしそもそもはアブラハムがサラを自分の妹だと偽ったために起きたことで、アビメレクに責任はないことが神によっても認められます。アブラハムも、恐れからそうしたことだと弁解しつつ、非を認め、問題は解決します。その時アブラハムに言ったアビメレクの言葉はこうです。

> アビメレクは羊、牛、男女の奴隷などを取ってアブラハムに与え、また、妻サラを返して、言った。「この辺りはすべてわたしの領土です。好きな所にお住まいください」（二〇・一四～一五）。

これによると、サラを返すさいに、アビメレクは、「羊、牛、男女の奴隷など」もアブラハムに与えています。自分のしたことにやましさはなかったけれど、他人の妻を後宮に入れたことのおわびのしるしです。その上でアビメレクはアブラハムにゲラルに住むことを許したのです。

こうしてアブラハムは、その地に、寄留の民として、安心して住まうことができるようになった、平穏な生活ができるようになったのです。そのことは彼にとって重要なことでした。

その中でイサクが誕生します。イサクの誕生地がゲラルだとは聖書に書いてありませんけれど、アブラハムとサラがネゲブ地方に暮らしていたときのことに違いありません。

イサクが生まれて、しばらくして、先週私どもが見たように、アブラハム家に激震が走ります。ハガルとイシュマエルが追放されます。この一件が落ち着くまで相当の時間がかかったでしょう。しかし神はそれに耐えられる生活の場所を整えてくださっていたのです。イサクを養育するためのよい環境を備えてくださっていたといってもよいように思います。

こうして見ると、アブラハムのゲラル滞在を語り始めた二〇章から二一章は、全体としては、イサク誕生という重要出来事がその中であったわけですが、さすらいの民でありながら、安定した生活を神は用意した下さったということを告げているように

見えます。

とり分け、この地、ゲラルはペリシテの国です。ペリシテといえば、私どもはアブラハムから何百年も後のことですが、士師時代、そしてサウル、ダビデの王国時代、ペシリテとずっと対立、敵対しつづけたことを知っています。そうであれば、この一連のゲラルでのアブラハムの生活は、ペリシテの人々とも友好な関係の中にあったことを証し、後のイスラエルの人びとにも、平和への、何らかのメッセージともなっていたのではないかとも思うのです。

2　共存を求めて

今日の箇所は、いま申し上げたように、アブラハムが、異郷の地にあって、その地の人びとと、いかにうまく共存しながら生きたかということ、その一端を明らかにしているところです。ただ少し分かりにくいところがあり、その点に触れながら話したいと思います。

この箇所には二つの物語が混在していると言われています。一つは、アブラハムとアビメレク、両方が互いに友好な関係を結ぼうとし、そのために努力したことを語っている部分です。

もう一つの物語は、アブラハムの掘った井戸が奪われることがあったらしく、それでも、それによって生まれた対立、争いを乗り越えて、互いの利益を図って行こうとしたことを物語っている部分です。

どちらも、互いに共存していくというところに、その結果があるために、二つの物語が重なって見え、分かりにくくなっています。二つの物語の線を簡単に辿ったあとに、大事なのは共に生きていこうとしたところですから、そこを取り上げます。

まず第一の物語の線です。

> そのころ、アビメレクとその軍隊の長ピコルはアブラハムに言った。「神は、あなたが何をなさっても、あなたと共におられます。どうか、今ここでわたしとわたしの子、わたしの孫を欺かないと、神にかけて誓ってください。わたしがあなたに友好的な態度をとってきたように、あなたも、寄留しているこの国とわたしに友好的な態度をとってください」。アブラハムは答えた。「よろしい、誓いましょう」（二二～二四節）。

これが一つ目の線の始まりです。先に私どもは、二〇章で、アビメレクが、アブラハムに対し、どこに住んでもよろしいと語った場面を振り返りました。あそこは、アビメレクが、サラを後宮に入れたことをわびて、自分の領地に住むことを許したという形になっていました。

ここでは、もっとはっきり、アビメレクが、王たる者が下手に出ています。その理由は、「神は、あなたが何をなさっても、あなたと共におられます」と、アブラハムの特殊の力を認めたためです。自分たちがこれまで友好な態度をとってきたように、われわれにも同じ態度を見せてほしいというものです。これはアビメレク側のお願い、懇願です。

アブラハムは、むろんそれを受け入れます。「よろしい、誓いましょう」。「よろしい」という言葉は、誓ってやるよ、というようにも聞こえますが、少し訳しすぎかも知れません。元の聖書は、単純に「私は誓います」です。じつはうやうやしい態度で王の願いを受け入れているのです。アブラハムとアビメレク、二人は互いに誓い合います。第一の物語の結びは二七節です。

アブラハムは、羊と牛の群れを連れて来て、アビメレクに贈り、二人は契約を結んだ（二七節）。

契約を交わし合ったとき、アブラハムが「羊と牛の群れを連れて来て、アビメレクに贈」ったのは、アブラハムが、アビメレク王に対して、へりくだりなした行為だと考えてよいと思います。

さてもう一つの物語の線、それは井戸を巡っての争いから始まります。

アブラハムはアビメレクの部下たちが井戸を奪ったことについて、アビメレクを責めた。アビメレクは言った。「そんなことをした者がいたとは知りませんでした。あなたも告げなかったし、わたしも今日まで聞いていなかったのです」（二五～二六節）。

ここの「責めた」という言葉の訳は、いくつかあります。「とがめた」、「非難した」、「苦情を言った」などです。言葉としてはその通りですが、これはしかし強い言い方ではありません。

アビメレク王の人格やこれまでの友好的な関わりからして、こうして王を非難するのは不当だとさえ、たとえばカルヴァンなどは言っています。彼はむしろ、アブラハムは井戸のことで苦しみながらも、騒がずに忍耐していた、そして機会が与えられたときに、後日のために権利の保証を求めたのだと。アブラハムの節度ある態度をここに見ています。

第二の物語、井戸を巡る結びは、三一～三二節です。

それで、この場所をベエル・シェバと呼ぶようになった。二人がそこで誓いを交わしてからである。二人はベエル・シェバで契約を結び・・・（三一～三二節）。

この誓いを交わし、契約を結ぶときも、じつはアブラハムは、アビメレクに「七匹の雌の小羊」（二八節）を贈っています。井戸の損害賠償を求めるどころか、アブラハムは反対に、自分の財産の中から、おそらく高価な「雌の小羊七匹」を贈って、契約し、将来の井戸の所有を保証してくれるように願うのです。

3　地上を旅する神の民

こうして考えると、この異郷の地でのアブラハムのまことに謙遜な態度と関わりが明らかになっているように思います。

こうしたことは、これを読む、あるいは聞く後のイスラエルの人びとには、一つのメッセージとなったのではないでしょうか。創世記の語り手は、ゲラルが、後に憎きペリシテ人の占領することになる領土に位置していたことを、聴き手に思い起こさせ、そこに教訓を込めている（ギブソン）。アブラハムはそこに滞在しているあいだ、異教の隣人や支配者とも平和に暮らすことに成功したのです。

こうしたことは同じく神の民としてこの世に置かれ、この世を歩む私ども教会にとっても教えるところ多いと思います。

世にカルトと称せられる集団がいろいろの問題を引き起こしていることは、ご承知の通りです。若い人たちが勧誘されるために大学も教会もつねに注意していることはいうまでもありません。

こうした集団に共通していることは、閉鎖的で、自分たちの集団を救われた団体とし、この世を全面的に悪と見なし（難しく言えば二元論）、この世と、この一般の社会と関わることを否定することです。そのため人間としてのふつうの感覚をだんだん失っていくことにもなります。

しかし信仰の人アブラハムがこの世、すなわち、ゲラルでとった態度は違っていました。

新約のヘブライ人への手紙は、アブラハムも含めて、父祖たちの在り方を、約束されたものを求めて地上を歩む旅人と見ています（一一・一三）。この世での歩みがどんなに困難なものであっても、天の故郷への熱望に生きる人びとと見ています。とはいえそれは彼らが、この世の旅人としての生活をいい加減なものと考えたということではありません。地上を旅する神の民としての教会。私どももこの世を否定しないのは神が世を愛しておられるからです。

もちろん無差別に世に倣うことがあってならないことは言うまでもありません（ローマ一二・二）。しかし私どもは世の人の苦しみも喜びも自分のものとしながら、世の救いのために、世において、世に開かれて生きるのです。アブラハムのここでの在り方は、私どもにそのような生き方を示しているように思います。

そうした中、しかし、この箇所で、もう一つ、地上を旅する私どもが見落としてならないのは、今日の箇所の最後のところです。

アブラハムは、ベエル・シェバに一本のぎょりゅうの木を植え、永遠の神、主の御名を呼んだ（三三節）。

世のために、世の救いのために地上を旅する神の民としての教会はまた、礼拝をささげつつ歩む群れだということです。それはこの世のただ中で行われます。この世のためになされます。

アブラハムはそこに一本のぎょりゅう（御柳、英名はタマリスク）の木を植え、永遠の神、主の御名を呼んだとあります。ぎょりゅうの木というのは目印にもなる大きな木です。それをアブラハムは植えた。私どもも、この世の中で、天の神を指し示す目印、証しとなって歩んでいきたい願うものです。

（二〇二〇・一〇・一一）